

ルカによる福音書19章11-48節 「神の国を拒む悲しみ」

1A 王を拒む者 11-27

1B 主人に忠実なしもべ 11-19

1C 神の国の現れ 11

2C 再来までの商売 12-19

2B 関わりを持たぬ人 20-27

1C 自分の思ったままの裁き 20-23

2C 取り上げられる財 24-27

2A 平和の道を拒む者 28-48

1B 王の到来の備え 28-40

1C ろばの子 28-36

2C 御名によって来られる王 37-40

2B 都を泣かれる主 41-48

1C 訪れの日を知らぬ者 41-44

2C 宮清め 45-48

本文

ルカによる福音書 19 章を開いてください、今回は 10 節まで読みましたので 11 節から見て行きます。19 章では、イエス様がエリコに入られたところから始まります。そこに取税人ザアカイがいて、そして、彼の家にイエス様が泊まりました。そして、そこに喜ばしいことに救いが訪れました！彼が、財産の半分を貧しい人たちに施し、脅し取った物は 5 倍にして返すと言いました。イエス様は、「19:9-10 今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」と言われました。ザアカイの心は一新されました。悔い改め、悔い改めの実を見ることができます。

1A 王を拒む者 11-27

1B 主人に忠実なしもべ 11-19

1C 神の国の現れ 11

11 人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。

今、この喜ばしい救いがこの家に訪れましたが、今、その周りには、いろいろ弟子たちや群衆が、そこにいたことでしょう。そしてパリサイ人たちも、遠くから眺めていたかもしれません。エリコに入る時には、目を開かれたばかりの元・盲人もいました。そして、時は過越の祭りが近づいています。

過越の祭りは、虐げられているイスラエルの民がエジプトの縄目から解き放たれることを覚えるものです。そして、彼らは過越の祭りの毎に、最後の挨拶は、「来年はエルサレムで」というものでした。つまり、メシアが来られて、エルサレムで王となり即位し、そして世界は神とメシアのものとなり、永遠の国が広がる、ということを感じていました。今日、救いがこの家に来ましたというイエス様の言葉の響きは、聞いている人々には、神の国がすぐに現れると聞こえたのです。彼らの熱狂と興奮が伝わってきます。彼らは、かつての出エジプトのように、神がローマの力を打ち砕き、イスラエルをそこから贖い出されると信じていたのです。

イエス様の復活後、エマオの途上に行く弟子たちが、「24:21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。」と言いましたが、まさしくそのことを話していたのです。けれども、イエス様は、キリストはまず苦しみを受けてから、それから栄光に入るはずではなかったか？として、キリストが罪の赦しのためのいけにえになられて、甦られ、そして栄光に入るのだということを聖書から説き明かされました。けれども、この時にそのことを分かっていたのは、弟子たちの中でさえいませんでした。それで、イエス様は、たとえを話されます。それは基本的に、人々は王であるご自身を拒むという、厳しい現実です。

2C 再来までの商売 12-19

12 イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。14 一方、その国の人々は彼を憎んでいたのです、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。

ここの喩えは、聞いているユダヤ人には、すぐに連想して、思い出すことがあります。彼らの王は、ヘロデであります。まず、イエス様がお生まれになった時はヘロデ大王でしたが、紀元前 40 年、彼はローマ皇帝からユダヤの王として任命されることを求めて、ローマに旅行しました。彼が紀元前 4 年に死にました。そして後継者であるヘロデ大王の息子アルケラオは、同じようにローマにユダヤ人の王として任命されるために、ローマに旅行に行ったのです。このことをすぐに彼らは思い出したに違いありません。そしてアルケラオは、旅に出ていくにあたって、不在中のことを家臣たちに任せました。ところが、ユダヤ人たちは皇帝に使いを送って、アルケラオを王として任命しないように嘆願しました。なぜなら、エルサレムで彼はユダヤ人たちを三千人も殺していたからです。ですから、ここで、「その国の人々は彼を憎んでいたのです、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた」とイエス様が言われた時に、彼らはこのことを思い出したはずで

弟子たちは、国民には人気のない、むしろ憎まれているような王の家臣として、その任されたものを忠実に管理していくように命じられたのです。自分自身は王としてあがめています、今は、

遠くにいます。つまり、イエス様が死んでよみがえり、天に昇られて、物理的にはこの地上におられない中、けれども一般の国民はイエスを自分たちの王として認めていないのに、それでも、「ここは、王イエスの直販店です。」として、店を出さなければいけないような状況です。いかがでしょうか、私たちは礼拝を捧げているということは、まさに「キリストをまだ見ずして、それなのに王としている」ということに他なりません。一般には、王として認められていないのに、そして今、ここにいないのに、それでも王として生きていくのです。

身分の高い人は、十人の僕にそれぞれ一ミナを与えて、それで商売をしろと言いつけています。それは、主の救いを受け入れた盲人やザアカイがいますが、神の恵みによる賜物を受けたと言っているでしょう。ペテロは、福音を聞いたユダヤ人たちに、「使徒 2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と言いました。賜物としての聖霊です。一ミナは、労賃の 100 日分の金額です。もし一万円が一日の労賃であれば、100 万円を受け取って、それを増やしなさいといいつけられています。私たちは、神の恵みによる救いの賜物を受けました。そして、主に忠実に仕えることによって、そこから出て来る実を聖霊によって結ばせます。

十人の僕に、合計、十ミナということで、十が強調されています。それは、「試されている」ということを示しているのでしょう。王が嫌われているのに、王を売りにして商売しているのですから、しかも王は不在の中でそれをしなければいけないのですから、相当に不利な商売です。それなのに、私はイエスを王として行きますということは、相当の忠誠心が試されます。こんな話を本で読みました。ソ連が崩壊した直後のロシアで、神学校への希望者の面接で、「洗礼を受けたのはいつですか？」という質問があったそうです。なぜそんな質問をするのか？とその本の著者がすると、面接をしている人は、こう答えました。「ソ連時代に洗礼を受けたとすれば、それは死をも覚悟しなければいけない相当なことです。けれども崩壊後であれば、いろいろと質問しなければなりません。」私たちが、イエスを主として生きていく中で、状況が不利になっていたとしても、それでもこの方に忠実に仕えるかどうか、試されています。

15 さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。16 最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』18 二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで五ミナをもうけました。』19 主人は彼にも言った。『おまえも五つの町を治めなさい。』

最初のしもべは、一ミナを十ミナですから、百万円の資金で王が戻って来るまでに一千万円にしたのですから、相当の資産運用をしたということです。同じように、五ミナもうけました、と言ってい

る僕も、五百万円にしたのですから、こちらもすごいです。けれどもここで大事なものは、どちらも、「あなた様の一ミナ」と言っているところです。また、「もうけました」というのは「生まれました」とも訳せるそうです。つまり、彼らには自分がもうけを作ったという意識は少ないのです。あくまでも、主のくださった恵みに留まり、その中で主に忠実に従っている時に、主が増やしてくださったという意識しかないでしょう。チャック・スミスは、カルバリーチャペルがこれだけ増え広がったことについて、「私は、見物人です。主がこれだけの大きいなることをしてくださったことを、ただ見ている者です。」と表現していましたが、主のなさることをただ見ているということです。

ですから、「おまえはほんの小さなことにも忠実だった」と彼の主人はほめています。一ミナは、相当な額だと思うのですが、神にとってはほんの小さなことであり、そしてそれに忠実だったということほめています。ビリー・グラハムについて、彼が信仰の先輩から、「15分、神に祈り、15分、神から聞き、15分、人に伝えなさい」と言われたそうです。祈り、聖書を開き、そして伝道することですが、彼の中にはそういう小さなことについて、イエス様に従ったまでだとしか意識はなかったことでしょう。一にも、二にも忠実だということです。

それから、報いではありますが、「町を治める」ということです。興味深いことに、財産をもって、レジャーに行くことではなかったのです。イエス様は、教会に対して、「1:6 ご自分の父である神のために、私たちが王国とし、祭司としてくださった」と黙示録にあり、私たちが神の国において、統治を任されるのです。そもそもが、罪を犯す前のアダムが、万物を支配するように命じられ、彼は動物が自分に連れてこられて、それに名を付けるという労働もしていました。人々はしばしば、キリスト者は何か褒美がもらいたいから信じたのではないか？と思われるのですが、報いとは、本来、人に与えられていた務めを回復することでしょう。ですから、キリスト者になって、自分が神に仕え、神に用いられることを望まず、個人の事だけで動いているなら、「では、何のためにクリスチャンになったのですか？」と問わなければいけないのです。

2B 関わりを持たぬ人 20-27

1C 自分の思ったままの裁き 20-23

20 また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございます。私は布に包んで、しまっておきました。21 あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったのです。』22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はおまえのことばによって、おまえをさばこう。おまえは、私が厳しい人間で、預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取ると、分かっていたというのか。23 それなら、どうして私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうしておけば、私が帰って来たとき、それを利息と一緒に受け取れたのに。』

この僕は、「主人のことには、関わりたくない」という人でありました。「布」であります、これは、

汗を拭うための布だそうです。ですから、主人の財産を扱うにはあまりにも粗末であり、商売どころかなくなってしまうかもしれない、盗まれてしまうかもしれないぐらい危うい行為です。そして、「預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方」というのは、当時、そういった人がいてもおかしくなかったぐらい、当時は苛酷な社会でありました。搾取する人はざらにいました。彼は、主人がそういった人だと思って、関わりたくなかったのです。

それで、主人は、彼がそのような見方をして一ミナに関わりたくなかったので、彼のそのような主人へのイメージに、彼を捨て置かれるかたちで裁きます。22 節の主人の言葉は、自分がそうだとやっているのではなく、彼の言っていることを繰り返しているだけです。主人が怖い、搾取する人であれば、搾取されるままにしておかれるということです。「銀行」に預ければよかったですではないか？という言葉も辛辣で、ここの銀行は今のようなものではなく、云わば高利貸し業のようなものです。あなたが、わたしをそんな搾取するというのなら、高利貸し業も人から奪い取るようなことをしているが、それをすればよかったですのと皮肉っているのです。

しばしば、お話ししますが、人が犯す大きな罪の一つは、「不信」なのです。神が良い方、善なる方なのだとすることに對する不信なのです。神に対して文句を言っているのですが、実はその文句は本物の神ではなく、自分で勝手に作り上げた神のイメージなのです。そして、裁く者は裁かれるとイエス様が言われたように、そのまま勝手に描いたイメージの通りに自分になっていくということがります。神が恐ろしい方だと思っているならば、神から退いて、神に関わらないことによって、恐ろしい罰を受けることになります。「ヘブ 10:38-39『わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。』しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

2C 取り上げられる財 24-27

24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナをこの者から取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい。』25 すると彼らは、『ご主人様、あの人はすでに十ミナ持っています』と言った。26 彼は言った。『おまえたちに言うが、だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。』

ここを読むと、主は不公平な方のように思われるかもしれませんが。誤読すれば、まるで資本主義によって富が不平等に分配されていき、富んでいる者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるように思えるかもしれません。けれども、ここでは神の恵みの原則についてイエス様は話しています。つまり、神の恵みの賜物は、「持っている者」すなわち、イエス様ご自身を受け入れている者、イエスご自身こそが命であり、財産であります。この方を持っているならば、永遠の命を持っており、そこには無尽蔵の恵みが用意されているのです。

その一方で、持っていない者とは、イエス様の近くにいて持っているように振る舞いながら、実は核心部分でイエス様を受け入れておらず、罪を悔い改めていない人のことです。したがって、いくら自分がイエス様から受けていると言われている財産も、それを取り上げられるということです。イエス様の近くにいるようで、実は受け入れていないという人々への警告の言葉であります。そして、主はご自分の恵みを無駄にすることはなさいません。十トンの恵みを用意されているとすれば、一トンを無駄にしたくないのです、それで他の者たちに分け与えられるのです。恵みはますます豊かにされていくものであり、既に持っている者に分けてくださいます。

主は、このように働かれます。イエス様と豊かな関係を持っている人はますます祝福されます。けれども、それとなく付き合っていこうとする人は、持っていると思っていたものまでがどんどん、取られていきます。これは不平等のように見えますが、いいえ、平等にイエス様を自分の主として生きていこう、平等な機会が与えられているのです。ですから、ここで弟子として付いてきているようだけれども、実は、救いの恵みを受けていない人たちも、イエス様に付いてきている人たちの中でいたことでしょう。そういった人々に対する警告です。

27 またさらに、私が王になるのを望まなかったあの敵どもは、ここに連れて来て、私の目の前で打ち殺せ。』

こうやって、神の国が今にでも来てほしいと願っている人々にある矛盾を、イエス様は指摘されました。その王なる方、キリストを受け入れずして何をもって神の国なのか？ということです。むしろ、迎え受け入れるのではなく、王なる方に裁かれてしまうのです。事実、イエス様を指導者たちが拒んだ約 40 年後、70 年にローマによってエルサレムが破壊されてしまいます。

2A 平和の道を拒む者 28-48

1B 王の到来の備え 28-40

1C ろばの子 28-36

28 これらのことを話してから、イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。

ついに、エリコからエルサレムに上る道を歩いていられました。これで、9 章以降続いていた、エルサレムへの旅は終わりを迎えます。次についに、エルサレムに入城されます。

29 オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニアに近づいたとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。30 「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、連れて来なさい。31 もし『どうして、ほどこのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」32 使いに出された二人が行って見ると、イエスが言われたとおりであった。33 彼らが子ろばをほどこいていると、持ち主

たちが、「どうして、子ろばをほどくのか」と彼らに言った。34 弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。

オリーブ山を越えると、ケデロンの谷を経てエルサレムの城壁にぶつかります。初めにベタニアの町が出て来て、それからベテパゲの町です。もうそこは山の麓にあります。王なる存在が都に入り、そしてそこに着座するのであれば、その国民は用意周到な準備をしますね。今、天皇陛下の即位式が近づいていますが、そのための入念な準備を政府レベルで行なっています。そういった備えがあってこそその王の都への入城です。けれども、イエス様は、ご自身でその用意をしておられます。ここからして、人間の王とは比べ物にならないぐらい、質素な「お入用」であります。

主が子ろばを用意させておられます。主は、全てのことを知っておられますから、子ろばがあるところも知っておられました。そしてこれは、イエス様が力ある王として馬に乗って来るのではなく、平和で柔和な方として来られるためでした。ゼカリヤが預言しました、「9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」主が、力をもって栄光の姿で現われるのではなく、正しく、救いを賜る方で、柔和でろばに乗られるとあります。これを成就させるためですが、弟子たちはこのことについてはイエス様が復活され、昇天されてから、ようやく悟ることができたと思徒ヨハネは記しています(12:16)。

35 二人はその子ろばをイエスのもとに連れて来た。そして、その上に自分たちの上着を掛けて、イエスをお乗せした。36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。

国の指導者が入って来る時に、赤のカーペットが敷き詰められることがありますね。空港で降り立った時に、そこに敷きます。それと同じように、弟子たちはイエス様の乗られるろばの子にも、そして他の人々は道に上着を敷いています。聖書には、王が立てられる時に上着を脱いで、王を表敬します(例: II 列王 9:13)。

2C 御名によって来られる王 37-40

37 イエスがいよいよオリーブ山の下りにさしかかると、大勢の弟子たちはみな、自分たちが見たすべての力あるわざについて、喜びのあまりに大声で神を賛美し始めて、38 こう言った。「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」

ろばの子に、山の東の麓から乗られて、その坂を上り、そして下りにさしかかりました。山の頂上からは、ケデロンの谷ごしに、モリヤ山やシオンの要害など、美しい光景が広がっていたことでしょう。そして、下りにさしかかると、彼らはついにここで王なるキリストが降りて来られるとして、高揚し

て、弟子たちが大声で叫んだのです。「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」これは、詩篇 118 篇にあるメシアの預言からです。そこで、メシアなる王がエルサレムに入る時の姿を歌っています。

19 義の門よ私のために開け。私はそこから入り【主】に感謝しよう。

20 これこそ【主】の門。正しい者たちはここから入る。

21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答え私の救いとなられたからです。

22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。

23 これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。

24 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。

25 ああ【主】よどうか救ってください。ああ【主】よどうか栄えさせてください。

26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。

27 【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

26 節に、弟子たちの叫んだ言葉がありますね。けれども、弟子たちはさらに、「王に」という言葉を付け加えています。そう、主の御名によって来られる方こそが、私たちの王であり、キリストであるということを書いてあるのです。この中に、「ホサナ」救ってくださいという言葉もあります。それから、イエス様が宗教指導者たちに指摘されたのは、「家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。」ということでした。これがあって、初めてメシアの預言が成就するのですから、確かにこの方は捨てられなければいけなかったのです。

そして弟子たちが叫んだ中には、「天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」というものであります。これは、人の子が天において、神ご自身の前に出て、そして栄光を受けられ、あらゆる主権と力が与えられ、諸国を治めるダニエル書の預言を背景にしていることでしょう。「ダニ 7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」これが、天にある平安、いと高き所における栄光です。王の即位、そしてその後の永遠の御国の樹立です。

39 するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言った。40 イエスは答えられた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

パリサイ人は、これが明らかにメシアとして弟子たちが迎え入れていることに気づきました。です

から、神への冒涇だとみなしたのです。けれども、イエス様はここで、公にご自身がメシアであることを認めさせたのです。「この人たちが黙れば、石が叫びます。」と言われます。山を下りたところには、メシアが来られるところで復活することにあやかるために、その斜面に多くのユダヤ人の墓があります。その石が叫ぶだろうというのです。まるで、墓から死人がよみがえって、出て来そうな勢いさえ感じます。

午前礼拝でお話したように、イエス様はここで、ご自身がメシアとして歓喜されることを拒まれませんでした。これまでは、そのような動きに対して強い警戒を示されました。しかし今、ダニエル書9章の預言にもあるように、エルサレムとユダの民について、69週目にメシアが来るという預言があり、その時こそが神の訪れの日であるからです。先ほどの詩篇で、「これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。」とありますが、この日のことです。主は、この日を平和の訪れとして、備えられました。

2B 都を泣かれる主 41-48

しかし、そうではないことも、主はご存じでした。

1C 訪れの日を知らぬ者 41-44

41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」

オリブ山を少し下がると、中腹に教会があります。今は、岩のドームが黄金に輝いて目立ちますが、そこにかつては神殿が建っていました。そこで主が泣かれたのではないか？と思い、記念して教会を建てたようです。イエス様は、平和の道とは異なることが起こることを前もって見ました。ローマに包囲され、エルサレムは徹底的に破壊されます。これが紀元後70年に起こりました。ザアカイには、「今日、救いがこの家に来ました」という平和が来たのですが、その日を知らなかったとエルサレムに語られます。

けれども、それは情報がないから知らなかったのではなく、心を鈍くしているから知らなかったのです。人は情報として目に入っている、心が頑なであれば、目に隠されているのです。私は、ミッション大学に通っていましたが、ある時、高校の同窓会がありました。東京で開かれましたが、たまたま同じ大学を卒業した先輩がいました。だから高校も大学も同じということです。そして私が、大学がキリスト教であることを話したら、まるで知らなかったような反応をします。キリスト教

概論もあるし、チャペル出席もあったはずなのに。情報があっても、心が鈍ければ、知ることができないのです。

2C 宮清め 45-48

45 それからイエスは宮に入って、商売人たちを追い出し始め、46 彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、48 何をしたらよいのか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。

ここから、宮の中に入られました。預言者マラキが、主が入られたら、その神殿が清められることを語りました。「2:1-2 あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の【主】は言われる。だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。」イザヤ書にあるように、祈りの家であるはずのところが、エレミヤ書にあるように「強盗の巣」(7:11)にしていたので、それでこの清めを行われました。

このような損得勘定が、平和の道を知ることが出来ず、主の訪れの日を知らずにいさせました。自分の損得勘定で動いていれば、キリストが王であることがいつまでも分かりません。この方に忠誠を尽くすことも分かりません。そして、むしろ自分を滅びへと向かわしてしまうのです。

そして 47 節からは、イエス様の教えです。殺意を抱いている宗教指導者の前で、イエス様が教えておられます。20 章に、イエス様を陥れる質問がやってきます。けれども、主は見事に答えて、相手を黙らせます。イエス様は、確かに欠けのない正しい方であることが証明されます。